

# ネオ昭和 からむし通信

■本社 / 〒949-8522 新潟県十日町市伊達甲 236 TEL (025) 750-2857 FAX (025) 750-2858  
 http://www.karamushi.jp/ E-mail cfy49400@nyc.odn.ne.jp 発行人 / 村山好明  
 ■上越事務所 / 〒943-0804 新潟県上越市新光町 2-7-20 TEL080-5225-3318 (所長: 米山康久)

第5号 〈糸紡ぎの巻〉  
 発行 / 2009年3月4日

## 十日町でからむし栽培

当社は、平成20年度(働)にいがた産業創造機構(NICO)「ゆめわざものづくり支援事業」の「ものづくり支援事業」交付決定を受けました。

事業名は、「十日町からむしブランド確立のための機械化による糸作り」という長い名称です。

十日町地域は江戸時代まで「からむし」を原料とした「越後縮」の小千谷・堀之内と並ぶ三大産地でした。

ところが明治時代以降安くて織りやすく手間のかからない化学繊維の普及により「からむし」の存在はほとんど廃れていってしまいました。

10年前のことです。この「からむし」生地を何とかならないものかと新潟県工業技術総合研究所・素材応用技術支援センターへ持ち込みさまざまな検査を行なったところ通気性・透湿性・耐久性に優れ・汗ばんでも肌に密着せず、しかも帯電摩擦(静電気)が起きにくく、虫がつきにくい(江戸時代に織られた袴が十日町博物館に現存しています。)などの素晴らしい結果を得る事ができました。ひとことと言うならば「お肌に優しい

繊維」であることが判明したのです。

そうであるならば、呉服も悪くないが現代にマッチした商品となり県内の織物工場・編み物工場を遍く歩き回りました。

思うようにいかず試行錯誤を繰り返しながら漸く「からむし製品」が出来上がりました。しかしながら、どうしても地域に密着した事業展開にしたいという思いが強く、十日町の「からむし」を原料とした糸作りが出来ないものか思案中の事でした。

十日町シルバー人材センターの存在を知った3年前から十日町市の山間部で「からむし」の刈り取りを始める事が出来たのです。第一歩です。ところがその間は問屋が卸しません。野菜と同じですが幹に栄養分を与えるよう「わき芽を摘む」ことと重要な「紡績」です。

そこで日本で一番大きな紡績工場を何度も何度も訪問し5回目で漸く地域興しのためならばということまで了解を取り付けました。

栽培地については、地元有志に相談したところ元十日町実業高校農業科実習地に空き地があ

り使用について快諾して頂く事が出来ました。肝心の畑に植える「からむしの根」は松代の有志が協力して掘り起こして栽培地へ運んで頂く事になりました。

## からむし茶うどんの発売本格化

昨年「からむし茶」を開発し試験的にうどんに練りこん

だものを限定的に販売していましたが好評につき、4月4日から19日まで上越市の大きなイベント「高田城100万人観桜会」で、(財)上越市観光コンベンション協会ブースを借りてお客様に提供することが決定しました。



波間美恵子さんと染色作家庭野政義さん

今年6月頃から始める予定です。これで名実ともに「十日町からむし」ブランドの確立を目指す事が可能になりました。



ごあんない

3月24日~26日

日本橋・にいがた館 NICOプラザ#2

3月29日

上越市文化会館

前進座公演に合わせて、親鸞聖人・恵信尼のからむしてぬぐいを発売致します。

4月4日~19日

上越市高田観桜会にて

からむし茶うどんを販売しております。

いま、注目のからむしを使用した商品・製品がどんどん増えています。今後の展開に乞うご期待ください!!

ります。

当面は地元イベントで販売し状況をしながら販路を開拓していきたくと考えています。

そのためにも今年は「からむし茶」を約60kg生産する計画です。これには最低でも「からむし」の生葉が200kg必要となります。地元有志や十日町シルバール人材センターに協力を依頼することにしています。



11月19日にオープンしたエイジングケアサロン美波さんで使っていた「からむし障子」です。染めは、白がコンニャク糊、茶色が柿渋染めです。

天地人

# 直江兼続の兜の「愛」を

## 「からむし織り」で商品化

「からむし織り」の専門店(有)ネオ昭和(村山好明社長)十日町市伊達)では、このほど、もともと越後、魚沼原産の青麻を原料とした「からむし織り」による商品製作、販売を開始した。これは、同社が開発した新商品で、名は「からむしジャンボ

や民家をモチーフに各種展覧会に出品するなど活躍。十日町織物産地の中にあつて染織デザイナーとして活躍している作家。手ぬぐいには十日町の染め技術を取り入れて、書は、今年のNHK大河ドラマ「天地人」の原作者火坂雅志氏の揮毫で「からむしは雪国の



庭野政義氏の筆による「からむし織り」の染め「手ぬぐい」

手ぬぐい」。素材は、よこ糸がからむし100%、たて糸は綿100%。サイズは幅36cm、長さ1m。図柄作者は、十日町産地の染色作家の庭野政義氏で、元十日町芸術協会会長。日本画家として、ふるさとの風景画

むしの木を2本自然に繋つたままの姿を描き、若草色で染め上げて、庭野氏の書で「夫婦からむし」と書き、落かんが押ししてある。「木綿」と「からむし」で織り上げた1mの長さの手ぬぐい

は、戦場で武將が「はちまき」にするものであるが、現代人にとつても大巾で風呂上がりなどに使用される実用的な面もあり、部屋の壁に吊り掲げて観賞用にもなる。売値1枚1,260円(税込)で「既に5千枚を売却済み。今年にかけて六日町や米沢などの観光地へ大量に販売していきたい」と村山好明社長は張り切っている。

「からむし織り」は、村山社

## からむしのワタからの糸紡ぎ 静岡県住田恭子さん

私が村山さんと出会ったのは、平成19年10月。沖縄で行われた「素材展」の研修旅行のことだった。1999年から2000年に北中南米をバイクで旅して以来、旅らしい旅はしていなかった。私にとって久しぶりの旅だった。

長が、10年前から原産地福島県昭和村で織り技術を学び、十日町産地での産業の一翼としていたいとして事業化に着手して以来、各種商品に活用しているが、「天地人」ブームの六日町、米沢、上越で一旗上げたいとPR宣伝に入っているもの。直江兼続人気と共に商品販売が軌道に乗ることが期待されている。(週報とおかまち 平成21年1月1日号掲載記事より)

素材展では、会場となった公民館の中には、沖縄の芭蕉布をはじめ、上布や葛布、大島紬など的高级織物がたくさん並べられていて、それはもう宝の山！一方、外の芝生の庭にはテントが並べられ、そこには、私が初めて目にするような、おもしろいブースがたくさん並んでいた。イラクサの糸やハイビスカスの

糸。ラオスから仕入れた綿糸や、インドネシアで織られた織物……。すべて、天然の素材。まさに、地球からの贈り物。以前、バイクで海外のいろんな場所を旅した時、たくさん本物を見、感じ、そこから多くのことを考えさせられた。私が海外を旅していた時は、まだ物作りの世界には携わっていませんでしたので、今思うと、「あれも見てくればよかった。せつかくこの場所を訪ねたのに見ずに帰ってしまった。」ということばかりだけれど、どう考えても、海外を旅した後、「物作りをしてみた」と感じた何かは、この旅の途中で目にした文化や、工芸だけに違いないのだ。

インドネシアの織物は、私にグアテマラの織物を思い出させた。グアテマラには、たくさんインディヘナの人達がいて、彼らの住む村々では、その村独自の柄を持っている。今でも、日常生活の中で、その柄で織られた色鮮やかな服を着ているのを見ることができるとだ。それは、美しく鮮やかな織物で、移動するたびに違う織物が見られて、とてもおもしろい国だった。

インドネシアのブースでは、織物の他に、現地で使われているスピンドルも売っていた。一見ただの木の棒。糸を紡いだことのない私には、初めはそれが何なのかわからなかった。隣の和綿を販売しているブー

スでは、綿の実をとる機料と、チャルカでの糸紡ぎの実演をしていて、目の前で、ふわふわの綿が糸になる様子は、何だか手品をみているようだった。このチャルカのもっと原始的な道具が、スピンドルとのこと。織物学校の学生さん達が、チャルカやスピンドルの使い方を教えてもらって、次々に糸が生まれていった。う〜ん、とっても不思議。おもしろそうでも、私もやり方を教えてもらい初挑戦。でも、いくらやっても、うまくいかない。見ると簡単そうなのに、見るとやるとじゃ大違いだ。

実は、このスピンドルを使っている紡ぎも、南米チチカカ湖のほとりで、私は見ていた。その時は、「このあたりでは、女の人が糸を作り、男の人がその糸を使って編み物をする」と聞いていて、実際にインディヘナの女の人が歩きながら、棒をくるくる回して何かやっているのを見たし、男の人が、ものすごい手さばきで、何色もの糸を使いながら、編みこみ模様の編み物をしているのを見てきているのだ。

「そうか」。これがあの時見た糸紡ぎなんだ。もつとしっかりと見ておけば良かったな。なんて思いつながら、再度挑戦。でも、結局その時はマスターできなかつた。でも、素材の素材から作れる手段である糸紡ぎに、にわかに興味が出てきていた私。家に帰ってから、スピンドルを自作しようとして、インドネシアのスピンドルの形を、しっかりと図面に取りらせてもらった。実は、稼げないから仕事にはなっていないけれど、指物の勉強をしている私。木を削りだす加工だけなら、今の私でも、何とか作れるかもしれないとふんだのだ。

最終日は、一緒に来た面々と、



平 美恵子さんの芭蕉栽培地 (沖縄県喜如嘉にて)

と。その他、からむしについて、いろんなお話しを聞かせてもらった。

私の乏しい知識では、「麻」は「麻」。分類すればいろんな「麻」の種類があるのは学んだけれど、実際に、麻の糸を比べて見たりすることはなかったので、村山さんのお話は、「へ〜」の連発だった。

からむしの織物も、以前一度だけ、昭和村の織り姫の織物を、静岡の展示会で見たことがあるだけだった。その時は、「なんて透明感と張りのあるきれいな織物なんだろう」と思っただけで、その織物の繊維を、いったん綿にし、手紡ぎするなんて発

た。



大井川葛布 村井龍彦さん (向かって右側) と共に (沖縄県首里城)



からむしワタを紡いだ糸から作った作品 (住田恭子さん作)

そんな話しを車中でしていたら、「興味があるなら、からむしのワタを送ってあげるけど、糸紡いでみない？」とお誘い。糸紡ぎに興味が出てきてはいたものの、その時は、まだ糸が全然紡げなかったので、そう話すと、「からむしのワタは、糸を紡ぐのが大変なので、なかなか糸を紡いでくれる人がみつからない。興味があるなら、サンプルで少しだけ送ってあげるから、チャレンジしてみて！」とおっしゃるので、挑戦させていただくことになった。

旅から帰って翌日。さっそくスピンドルを作り、とりあえず道具の準備は完了！となると、後は糸の紡ぎ方をマスターしなければ。

幸い、沖縄の素材展で「和綿」のブースを出していたのは、浜松の方。車で1〜2時間あれば、家から行ける距離なので、帰ってから、もう一度教えてもらわれるように、お願いしておいた。半日かけて、ゆっくり教えてもらい、ぶかっつこうながらも、糸が引けるようになったときには、「感動！」だった。ふわふわのワタが、目の前で糸になる。自分でやっても、何だか不思議。撚りかけることで、強度の高い「糸」を作り出した昔の人は、

すごいな〜ってつくづく思う。

村山さんからも、からむしのワタのサンプルが届き、さっそく手紡ぎのワタ作りが始まった。村山さんのおっしゃったとおり、和綿に比べ、からむしのワタは、とつても紡ぎにくい。でも、独特のぼこぼこした、ふしのある糸ができてきて、紡ぎはじめる時、おもしろかった。時間を見つけては、ぼちぼちと自分のペースで糸にしていく。村山さんにいただいたワタ、すべてを紡ぎ終わった時、ちょうど沖縄の素材展から、1年がたっていた。

糸が紡げたことを、村山さんに報告すると、「糸をそのまま送ってくれてもいいけど、できれば何か織ってみて！」とお話しが。まだまだ、織物上手ではない私だけれど、1年かけて紡いだ糸。できることなら、どんな織物になるのか、自分の手で織ってみたかったので、願ったり叶ったりのお申し出だった。とはいっても、まだまだ染めの勉強をしていない私。自分の力だけでは、作品として完成させることはできない。そう話すと、「こちらで、染めはするから、テールセンターみたいなものを織れる？」とおっしゃって下さったので、長さの違うテールセンタールを3枚、織ることにした。

緯糸が、せつかくからむしの手紡ぎの糸なので、経糸は、リネンを使うことにした。これなら、経、緯ともに、「麻」を使ったことになる。

織ってみると、ぼこぼこネップが目立って、なんともきれいな白生地が織れた。私が今までイメージして持っていた、いわゆる「からむしの布」とは、明らかに異質。素材は同じなのに、「績む」のと「紡ぐ」ので、こんなに雰囲気の違いが織物ができるなんて、おもしろい。この布が、染め上がったら、どんな作品になるのか。今から、とつても楽しみだ。

機械で大量に作ってしまうことに慣れてしまうと、そこで使われている素材のことや、商品の存在自体が、「あつて当たり前なこと」思いがちだけれど、こうして手間をかけることで、素材を改めて見直したり、ありがたさを感じることができた。自然布は、まさに「地球からの贈り物」だと思ふ。



からむしワタを手で紡いだ糸 (住田恭子さん作)

## Komachi

3月25日発売に紹介されます!

からむし&もずく入りうどんが  
高田城百万人観桜会に新登場!

●ネオ昭和“からむし”  
ネオショウワ カラムシ

地元でとれたからむしが入ったうどんと、佐渡産のもずくを練り込んだうどん(各350円)を、観桜会会場で提供する。めんはコシが強く、のど越しがいい。持ち帰り用に冷凍された「からむしめん」、「もずくめん」(1パック・3食分・各750円)も用意。タオルや手ぬぐいなど、からむしを使った商品も販売する。



高田公園内  
4月4日(土)〜19日(日)  
10時30分〜20時30分  
¥からむしのタオル、デザイン手ぬぐい各1,050円〜  
周辺臨時駐車場利用  
ネオ昭和“からむし”  
☎025-524-3318

## Komachi 2009年 Vol.235号で

当社の製品が紹介されました。



直江兼続「愛」の達磨  
(小) 2,625円

群馬のだるま職人による手作り。背中には「直江兼続」と「上杉謙信」の名前が書かれている。

からむしバンドルショーツ  
女性用 2,625円  
直江兼続が生産を奨励したという古代麻からむしを使ったふんどし。サラリとした肌触り。